

# 大谷學報 第十五卷 第二號

## 梵文無量壽經の因願に就て

——特に第十八、第十九願の修正——

泉 芳 璟

大谷學報の前身なる佛教研究第七號第三號に於て、梵文無量壽經に第十八願有無の問題と題する一文を寄せたのは大正十五年の九月であつた。當時梵文無量壽經が出版されてから四十三年目だと言き出してゐるから、本年は方に五十一年目である。あの一文を發表してから數年の歲月は過ぎたが、誰あつてこの問題を取り上げ、若くは予の考察に批評を加へて呉れる人もなかつた。所が昭和七年十二月發行の宗學研究第五輯に、西尾京雄氏が梵文無量壽經に於ける第十八願文の取扱と其解釋と題して一論文を發表し、その中に予の論文が紹介せられ、且つこれに對する批評も見えてゐる。予は兎もかくも自分の起稿したものが注意されたことに喜びを感ずると共に、尙ほ一層深くこ

梵文無量壽經因願に就て

の方面を研究して見たいと思ひ、此に筆を執ることゝした。一昨年西尾氏の發表に對してあまりに遅いではないかと云はれるならば、如何にも申譯なき次第である。何やらかやら事にかまけて遂に今日に至つた怠慢は御詫する外ない。尤も氏の論文を讀んだのが稍遅かつたのと、それに日外氏にお會ひした時、自分の意見だけは一應話して置いたのだから、幾分申譯が立たぬこともないが、やはり何か殘存すべき文書の形で發表して置くことが學界に於ての至當な處置でもあらうし、且つそこに幾分責任も感せられるので、此に筆を執るのである。

爾來七年の歲月は流れた。然し予の考の上に改變を起すべき何等の資料に接し得ないのである。然らば此に新しく稿を起す必要もないではないか。さよう、實のところ必要が無いかもしれぬ。然し今あの一文を讀み返して見るに、表現の方法にやゝ不備の點があり、十分に意を盡さぬ處がある。随つて誤解を惹き起す虞が無いでもない。仍て此に稿を起すことが全く無意義であるとは云へぬ。讀者希くは此の點を諒せられよ。

## 二

無量壽經の因願の數は現存する梵文及び支那譯から推定するに當に五十を數ふべきである。魏譯と唐譯の四十八は古來慣用せられた稱呼であるだけに如何にも決定的のものであるかの如く考へられ易いが、必ずしも四十八を絶對とするに及ぶまい。即ち左表に見える如く諸佛納受の一願を二五

(註一)

(註二)

と二六の間に加へ、華雨樂雲の一願を三二と三三の間に加ふべきである。さうすれば總數五十となる。又現行梵本では三十二相の願を一九と二〇の間に、智辯無窮の願を二八と二九の間に、常修梵行の願を三四と三五の間に加ふべく、第十九を二部分に分割して補正獨立せしむるならば是亦實に總數五十となるのである。漢吳の二譯が二十四願を數ふるは大體に於て前半の部分を擧げて後半を缺くもの、宋譯の三十六願は首尾に互り處々に脱漏あり、これら三譯は標型となし難い。魏唐二譯を梵文に對照すれば五十の數を認めねばならぬことは瞭として秋毫も疑なき所である。今左に對照表を示すであらう。

題	名	現存梵本	魏譯	唐譯
(一) 無三惡趣		1	1	1
(二) 不更惡趣		2	2	2
(三) 悉皆金色		3	3	3
(四) 無有好醜		4	4	4
(五) 神足智通		5	9	9
(六) 宿命智通		6	5	5

(二二)	(二〇)	(一九)	(一八)	(一七)	(一六)	(一五)	(一四)	(一三)	(一二)	(一一)	(一〇)	(九)	(八)	(七)
三十二相	植諸德本	臨終現前	念佛往生	諸佛稱揚	離譏嫌名	壽命無量	眷屬長壽	光明無量	聲聞無數	必至滅度	漏盡智通	他心智通	天耳智通	天眼智通

缺	19a	18	19b	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
---	-----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---

21	20	19	18	17	16	13	15	12	14	11	10	8	7	6
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---

21	20	19	18	17	16	13	15	12	14	11	10	8	7	6
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---

(二二)	必	至	補	處
(二三)	供	養	諸	佛
(二四)	供	具	如	意
(二五)	說	一	切	智
(二六)	諸	佛	納	受
(二七)	那	羅	延	身
(二八)	所	須	嚴	淨
(二九)	見	道	場	樹
(三〇)	得	辯	才	智
(三一)	智	辯	無	窮
(三二)	國	土	清	淨
(三三)	寶	香	合	成
(三四)	華	雨	樂	雲
(三五)	觸	光	柔	輒
(三六)	聞	名	得	忍

33 32 31 30 29 缺 28 27 26 25 24 23 22 21 20

34 33 缺 32 31 30 29 28 27 26 缺 25 24 23 22

34 33 缺 32 31 30 29 28 27 26 缺 25 24 23 22

(三七)	女	人	成	佛
(三八)	常	修	梵	行
(三九)	人	天	致	敬
(四〇)	衣	服	隨	念
(四一)	受	樂	無	染
(四二)	見	諸	佛	土
(四三)	諸	根	具	足
(四四)	住	定	見	佛
(四五)	生	尊	貴	家
(四六)	具	足	德	本
(四七)	住	定	敬	佛
(四八)	隨	意	聞	法
(四九)	得	不	退	轉
(五〇)	得	三	法	忍

46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 缺 34

48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35

48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35

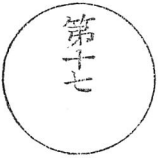
この對照表を熟視せられんことを望む。五十願(若くは四十八願と考へても可い)の中、第十七までは梵本と魏唐二譯はよく一致してゐる。但し第五の神足智通が魏唐二譯では六通の第五に置かれてゐるから第九である。これは最初に置くも、最後に置くも、「各據一義並不相違」とも云ふべきもので、要するに第五から第十までは六神通に關するものと云ふ點に於て一致すると見做して可い。次に第十二から第十五に至る四願も、前後順序に相違があるが、これも重視する程の問題でない。實のところ梵本よりも魏唐二譯の順序の方が自然であると云ひたい。即ち光明無量を第十二とし壽命無量を第十三とし、次に第十四に聲聞無數、第十五に眷屬長壽とあつた方が梵本に見える順序より遙かに自然であると思ふが、然しこれはこの儘でも敢て妨げない。要するに是れ亦梵本も魏唐二譯もよく一致するのである。随つて第一から第十七までは前後の順序はともかくとして、數に於ても意義に於ても一致すると見るべきである。又次に第二十二必至補處以下最後に至るまでは順序も意義もよく吻合し、少しも問題とすべきものはない。只その缺く所を填補するならば、魏唐二譯の缺く所は第二十六諸佛納受と第三十四華雨樂雲であり、梵本の缺く所は第二十一の三十二相と第三十一の智辯無窮である。さて此の如く第一から第十七に至るまでもよく一致し、第二十二から最後までもよく一致するものが、何故に梵本の第十八、第十九、第二十に於て甚しく一致を缺くのであらうか。虚心にこれを觀察する時、梵本のこの部分には必ずや何かの錯誤がなければならぬとなるので

ある。予が筆寫者の誤と斷じたのはこの全局を通觀した結果である。

三

予は寫本の筆寫者が二回の脱漏と一回の誤寫をなしたものであると説いた。然しこれは少し回りくどい云ひ方で、今これと同意義のことをもつと簡明に云ふならば恚うである。即ち疎漏なる筆寫者は第十七願註(三)までをどうやら正しく寫して來たが、第十八念佛往生の一願に至つて一願を飛ばして第十九臨終現前の一願を寫したのである。而も彼は氣づかずして第二十植諸徳本の願に移り、その一願の殆んど全部を寫し了らんとして類似の一語註(四)から、更に前に脱漏して寫さなかつた第十八念佛往生の願の後半に戻り、これを寫し了つて一願を結んだものである。故に梵本の第十八は實は第十九臨終現前の願であり、第十九は實のところ前半分は第二十植諸徳本の願、後半は念佛往生の願に當る。但し前半後半の語はやゝ穩當でない。前半分には違ひないが、實のところ第二十植諸徳本の願の殆んど全部と云つて可い。後半分と云ふのは實は「乃至十念註(五)(若不生者)不取不覺唯除五逆誹謗正法」だに當るけの文である。今誤寫の結果を圖示すれば、凡そ左の如きものである。

梵本第十七



梵本第十八



梵本第十九





即ち梵本第十七までは正しいが、梵本第十八は實は第十九臨終現前の願であり、又梵本第十九は實は第二十植諸徳本と第十八念佛往生の二願が抱き合つてゐるのである。これを合説と見るべきではない。極めて不自然に抱合してゐるに過ぎない。故にこれを正當の位置に戻すならば次圖のやうにすべきである。

梵本第十七



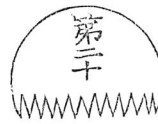
梵本第十九後半



梵本第十八



梵本第十九前



結果は梵本の第十九を二つに分割して後半分を梵本の第十七と第十八の間に置けば可い。この位の程度の寫誤はネパール梵本の筆寫者として別に取り立てゝ云ふ程珍らしいものでもない。寧ろ自然である。これは梵本の校訂に經驗のある人には首肯せらるゝことである。梵本では次に第二十一の三十二相の一願を全く脱落してゐる所から見ても、この邊に寫誤の多かつたことを暗示するものでなからうか。尙ほ第三十一智辯無窮の願と第三十八常修梵行の願との二つを後になつて脱してゐることは對照表によつて見られる通りである。

四

以上は魏唐譯を梵本と對照して自然に達せられた結果である。即ち梵本は當にかく修正せられねばならぬのである。かくて第十七願の次に後半分の第十八願即ち念佛往生の一願は置かるべきである。さて然らばその第十八願の前半分は如何。梵文缺けたるを以て知るに由なき状態である。第二十の植諸徳本の願は殆んど大部分存在し、缺けたる部分は推定填補も困難でない。然し第十八願の前半、「至心信樂欲生我國」の文に至つては、如何に填補するか。此に南條先生が魏譯から還元せられた第十八願の梵文があるのを參考までに引用したのである。勿論これを以て絶對のものと定めようといふのではない。

予は常に魏譯と唐譯(註八)とを以て標準となし、これを根據として引き出した結論が梵本のこの部分必ずや三願並存せねばならぬとなつたのである。漢吳譯は稍一致を缺くも、而も尙ほ三願の形跡は十分に認められる。宋譯の念佛往生の願を缺き、悲華經の植諸徳本の願を缺くが如き、異類の梵本と謂うべく、殊に悲華經の如きは説述の立場からして異なる異種の經典、今和會する必要もあるまい。只無量壽經の西藏譯が梵本の通りであることは奇なるが如きも、西藏譯が作られた梵本既にこの寫誤ありしものとすれば、この寫誤の由て來る久しと謂うべきである。

要するに魏唐二譯に對照して梵本のこの部分にも必ずや三願を認めねばならぬことを確信する。隨つて梵本第十九の不自然に抱合せの一願を分割して二願とし、これに適當の位置を與へようとい

ふのである。

理として此に三願が並存することは正當であらねばならぬ。第十八願已に相當する成就の文を有す。梵本も亦然うである。故に當然第十八願は獨立して存在すべきである。梵本に於てその第十九番目に植諸徳本を前分とした不自然なる抱合の形で現はれてゐるが如きことは不合理である。

今願文に就て詳細にこれを檢しよう。即ち梵本第十九番目の願は次の如くである。

「〔前略〕我が名を聞き了りてその佛國に生れんために念を發し、且つ諸善根を廻向せんに、無聞業を造り、正法の誹謗障礙を作す有情を除きて彼等は少くとも十念發起相續を以て其の佛國に生れずんば〔下略〕」

とある。

これ明かに前半分は魏唐譯の第二十願である。即ち魏譯では、

「聞我名號、係念我國、植諸徳本、至心廻向。」

唐譯では、

「聞説我名、以已善根、廻向極樂。」

であつて、善根廻向がその標語となつてゐる。魏譯の徳本は譯語の異で、意義は同じである。後半は魏唐二譯の第十八願の後半に相當することは説明を俟たぬ。即ち魏譯では、

「乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆、誹謗正法。」

唐譯では、

「乃至十念、若不生者、不取菩提、唯除造無間惡業、誹謗正法、及諸聖人。」

に相當する。

## 五

今梵本第十九番目の願を前後に分割して、「無間業云々」以下を第十七番の次第十八の前に置き、第十八番を第十九番とすれば即ちこれが魏唐二譯の第十九願となり、第十九番が當然第二十番となつてこれが魏唐二譯の第二十願となる順序である。

梵本の第十八番は

〔前略〕無上なる正等覺に於て念を發し、我が名を聞き了りて至心に我を念せんに彼等の臨終の時、其の心不散亂のために我は比丘の衆に圍繞恭敬せられて其の前に立たずんば〔下略〕〕  
であつて、魏唐譯の第十九願である。即ち翻譯では、

「發菩提心、修諸功德、至心發願、欲生我國、臨壽終時、假令不與大衆圍繞、現其人前者。」

唐譯では

「發菩提心、及於我所、起清淨念、復以善根、廻向願生極樂、彼人臨命終時、我與諸比丘衆、現

其人前、若不爾者。」

である。この中に於て發菩提心と臨終現前がその標語として著しく目立つてゐるからこれはまぎれは無い。但し唐譯には善根廻向といふことがこれにも出てゐる。次の第十八願にも出てゐる。この善根廻向を三願に互りて強調する所が唐譯の特徴と見るべきである。

次に分割された梵本第十九番の後半分、即ち移して第十七番の次、第十八番の前に置かれた部分に就ては問題は無い。その前分即ち魏唐二譯の第十八願の願事に相當すべきものは梵本に缺けてゐる。それは魏譯では

「至心信樂欲生我國」

であり、唐譯では

「聞我名已、所有善根、心心廻向、願生我國」

に相當する。此處でも唐譯では善根廻向の語が見えるのは注意すべきで、唐譯は由來善根廻向を強調するのが特徴と云つて可い。梵本この部分を缺くも、これは梵本の成就の文によつて推定すれば略ぼその形も判明する。即ち成就の文には

「淨心と俱行する深心を以て念を發起せば」

とあり、相當する魏譯には

「信心歡喜(註九)乃至一念至心廻向願生彼國」

とあり、唐譯では

「能發一念淨信歡喜愛樂(所有善根廻向)願生無量壽佛國者」

とある。此處にも唐譯は善根廻向の語を挿む。この比較對照によりて梵本にもこの部分に必ずやこれらに相當すべき文句が存在すべき筈なることを推測し得る。恐らくそれは南條先生の還元せられたものに近い何等かの文句であらう。その文は

「(前略)淨心にしてその佛國に生るゝために念を發して我を念せむに」

となつてゐるが、魏譯の至信心樂、その成就の信心歡喜、唐譯の淨信歡喜愛樂咸な同一義であらねばならぬ。それは畢竟梵本成就の文「淨心俱行の深心」といふに歸する。然らば唐譯第十八願々事の意義も亦この外に出でよう筈は無い。たとひ其處に善根廻向は強調せられてあつても、必ずや至信心樂の意義が内含されてゐなければならぬ。予は唐譯「信心廻向」の「信心」を「至心」と同意義であらうと推測する。「信心」なる用語は他にあまり見かけないが、決して單なる「念念」といふやうな意味ではあるまい。此處では淨信を内容としたものでなければならぬ。それは唐譯成就の文「淨信歡喜愛樂」の文から見て當然推定さるべき自然の結論である。

第二十植諸徳本の願の成就の文に就ては西尾氏の云はるゝ通り、南條先生の譯本九八頁及二〇〇

頁の註に第二十九章を指してあるのは無批判に承認してはいけないやうだ。この點は一考を要すると思はれるから、一往前の所論この第二十願成就文に關する點を撤回する。然し梵本第四十章以下註(一〇)から推論すれば、やはり第二十願の存在せざるべからざるは確實で、現形梵本は不完全である。隨て三願並存するやうに修正する根據は動かないと思ふ。尙ほ南條先生のこの因願と成就の關係を記入せられしは御養父の口傳と云ふわけではない。私の知れる限では先生の義祖父德母院の手寫にかゝる本願成就對と題する一本に據られたもので、遺憾ながらこの書今は見ることはできない。

## 六

予は梵本第十九番目の前半を南條先生と共に魏唐二譯の第二十植諸德本の願と見做す。これに對して西尾氏は梵本の第十九番はそのまゝ唐譯の第十八願とよく對同するとす。氏は「梵本に唐譯の第二十願は缺けてゐることゝなるものゝ如くである」と云つてゐる。物は見方によつて如何やうにもならうが、私には梵本第十九番をそのまゝ唐譯の第十八願と見做し難いのである。後半は固より論ずるまでもなく第十八願であるが、その前半は到底爾が見做し得ない。梵本第十九は前にも擧げたが、「我が名を聞き了りて、その佛國に生れんために念を發し、且つ諸善根を廻向せん」とある。この前半の分には願事が三個あつて、聞名と係念と善根廻向である。魏譯の第二十に對同することは何人も異存はあるまい。但し唐譯に配當する場合、第二十に配當するか、第十八に配當す

るか、そこが私と西尾氏の立場の異なる所である。西尾氏はそのまゝ第十八に配當するし、私はこれを第二十に配當せんとするのである。第二十の文面は前に擧げた如く

「聞説我名、以已善根、廻向極樂」(註一三)

とあつて、願事の上では聞名、係念、善根廻向、成な具備してゐる。故にこの配當には何人も異存はあるまい。但し問題となるのは唐譯の第十八である。即ち前にも擧げた如くその文は、

「聞我名已、所有善根、心心廻向、願生我國。」

であつて、これは如何見ても願事の點で聞名と係念と善根廻向であるから、第二十願と大體相似たものであり、梵本第十九番の前半と對同するとなす西尾氏の見方も一應尤もである。然し唐譯の特徴たる善根廻向を割引し、又同じく唐譯成就の文に照し、淨信歡喜愛樂を考慮に入れ、心心を至心の意味に解するならば、この文が魏譯の第十八と同列に扱はれても必ずしも不合理でないと思ふ。かく取扱ふことによつて三願並存の意義が明瞭になり、梵本と魏唐二譯の配當が整然たる一致を見るに於ては、寧ろ私は梵本第十九番の前半を魏唐二譯の第二十であると斷じたいのである。

尤もかく論じ來る時、聊か唐譯第十八の當相を強辯するとの難が有るかもしれぬ。然し假に唐譯は唐譯としてその特徴なり、異彩なりをそのまゝに發揮せしめるとしても、魏譯の三願並存の立場に照せば梵本はやはり三願並存せしむるが至當である。況んや唐譯に三願が形式でもともかく並存



せるに於てをやである。

この唐譯の第十八が一見第二十と類似せることは確かに私共が唐譯を見る上に困難を感せしむる點でもあり、幾分これは唐譯そのもの、缺點かもしれない。然し經典は單に一部分のみで斷案を下してはならぬ。全體を通じ、大局から見、又必要に應じては他の譯本に對照してその深意を汲まねばならぬ。私が唐譯の第十八を魏譯の第十八と對同せしめる態度なり立場なりは此に在る。南條先生の對照表もこの意を以て作られたものと信ずる。以上の意を了解せられたならば、私が只漫然と梵本第十九番を分割せんとするに非ざるを知らるべく、隨て私が如來會の第十八を分割せねばならぬ理由もない。況んや悲華經の願まで手を加へる意圖の無いことは明瞭であらう。

## 七

次に又三願の順序に就て考へて見る必要はないか。第十八念佛往生、第十九臨終現前、第二十植諸徳本、この順序で三願が並んでゐることは魏唐譯を始め諸譯本殆んど總て然りと云つて可い。漢譯は第十七後半、第十八、第十九が序の如く三願になつて居り、宋譯の如き脱漏の多い譯本ですらその第十三第十四が臨終現前、植諸徳本の順序を追ふ。吳譯は植諸徳本と臨終現前の前後が違つてゐるけれども、而も念佛往生は最も始に出てゐる。異類の經典悲華經に於てすら第四十五、第四十六は序の如く念佛往生と臨終現前である。梵本だけが臨終現前、植諸徳本、念佛往生の順序を取

る。これ頗る奇異に感ぜらるゝ點である。即ち梵本を主として圖を作れば次の如くなる。  
註(一四)

願名	諸譯						
	梵本	漢譯	吳譯	魏譯	唐譯	宋譯	悲華
臨終現前	一八	一八	六、七	一九	一九	二三	四六
植諸徳本	一九前半	一九	五	二〇	二〇	一四	
念佛往生	一九後半	一七後半	四後半	一八	一八		四五

この圖を一見して先づ氣づくことは諸譯本悉く念佛往生を最初にしてゐることである。仍て梵本が臨終現前を最初にしてゐることの不自然が否應なく感觸せられるでないか。即ち梵本の順序は諸譯本のそれに反して歪曲されてゐるものでなからうか。此處に前叙の寫誤問題を考慮に入れ、梵本の修正を施し更に圖を作れば次の如きものを得る。

願名	諸本						
	梵本	漢譯	吳譯	魏譯	唐譯	宋譯	悲華經
念佛往生	一九後半	一七後半	四後半	一八	一八		四五
臨終現前	一八	一八	六、七	一九	一九	一三	四六
植諸徳本	一九前半	一九	五	二〇	二〇	一四	

諸本の順序はこれで大體よく整つて來た。只吳譯の臨終現前と植諸徳本が轉反すれども、これは

吳譯そのものが全く異種の譯本で、文體も實はこの配當が果して的確か否かを決定し難い位の程度に曖昧を極めてゐる。これは重視せられる問題でもない。宋譯は恐らく念佛往生の一願を脱漏したものであらう。悲華經に至つては前にも述べた如く全く立場の異なる異類の經典である。即ち釋迦の濁世出現を高調して淨土建立を輕視した經典であつて、阿彌陀佛は釋尊よりも遙かに軽く見られてゐる限り、その誓願はあまり重視せられてゐない。三願並存しない所以も其處にある。隨て無量壽經の研究に於ては助成のためにこれを用ふることは妨げざるも、これを第一資料として依用する必要はない。又これを和會するにも及ばぬ。悲華經の第二十植諸徳本を缺くものは蓋し脱漏に非ずんば不完備のためであらう。これを唐譯と結合し梵本に對同して云々せんとするが如きは予は與みし得ないのである。予を以て「魏譯偏重」となし、「過ぎたり」と批判せらるゝ西尾氏は、同時に悲華經偏重の態度となり、及ばざるの憾なきに非ざるか。

### 結 語

以上思ひ出づるまゝに書きつけたが願みて要點を擧げるならば、先づ梵本因願を魏唐二譯に對照して、梵本の歪曲、殊に第十九番の抱合を指摘し、その性質に就て考へ、前半を唐譯の第十八とするか第二十とするかの立場を論じ、最後に願の順序に考へて、結局三願並存すべきものなるを論定したのである。禿筆意の存する所を展べ得ず。希くは更に批正を俟つてこの方面の研究を深めたい

ものである。(昭和九、五、二〇)

註(一) 本稿に於て支那譯なる名稱を用ひて、嚴密に漢譯なる名稱と區別す。支那譯なる名稱は漢吳魏唐宋の諸譯を一括して呼ぶものと知るべし。漢譯と云ふ時は平等覺經が後漢支婁迦讖譯なるが故に漢譯と呼べる、ものと濫する虞あり。但し平等覺經が果して後漢譯なるか否かに就ては別に論ずべきものあり。今之に觸れず。

註(二) 諸佛納受の願、南條先生の譯本には供養諸佛の願とあるもの。但し第二十三に同名の願あるが故に、これと混濫せんを顧慮して、今この命名をなす。この一願梵本にあるも、支那譯の漢、吳、魏、唐みな缺けり。宋譯の第二十第二十一はこの一願に當る。宋譯が他の諸譯に無きこの一願を有することは支那譯諸本中の特色として見るべし。

註(三) この第十七までにしても或は魏唐二譯の如き順序なりしものを寫誤せしやの疑なきに非ず。されど今暫らく之を措く。

註(四) 類似の一語とば若生不生者又は因果遂者に相當するもの。このことは予の前稿に委しければ此に贅言せず。

註(五) 「若生不生者」の一句は前半後半に通ずるが故に今括弧を以て圍み、省き得べきを示す。この種の例下同じ。

註(六) 南條先生は合説の立場を取られしならむ。濃厚にして述而不作を以て終始せられし先生の性格はこれに現はる。予はこれを分割せんとするもの。故に現形を不自然の抱合と見るものなり。

註(七) 梵文金光明最勝王經に一例を取らば、その七三頁に見えたる一節の如き、寫本にありて數頁を距てし部分に錯入し、二三〇頁一四行の *paṇḍita* なる一語は寫本に於て二〇五頁五行に移動せるが如き、其他この例枚舉に遑なし。

註(八) 西尾氏が予を以て魏譯偏重となすは當らず。

註(九) 括弧中の句は對照の句に非ざるも同文故來の意味にて引用せり。下同じ。

註(一〇) 唐譯の「心心回向」の「心心」は尙ほ研究の餘地あり。されど予を以て見れば、西尾氏の如く流志の誤譯とは決し得られず。恐らくこれは *Prasanna-citta* の如き語の意譯なるべし。尤もこれは今少し諸經典に互り流志の譯語例を精細に検討するに非ずんば輕忽に斷定することは不可ならむ。今のところ予は如來會第十八の成就に照してかく見るが至當ならん

と思考するのみ。

註(一一) 梵本第四十章、「世尊曰く、彌勒よ、他の諸佛國に住する菩薩の極樂世界に生ずるために疑を生じ、此の念を以て諸善根を植うるもの、爲に彼處に胎藏住處あり云々。」魏譯「佛告慈氏、若有衆生、以疑惑心、修諸功德、願生彼國、不了佛智(乃至)是故於彼國土、謂之胎生。」唐譯「若有衆生、墮於疑悔、積集善根、希求佛智云々。」

かく疑悔の心もて善根を積むものと、明信佛智のものとは區別せる點より、これを第二十と第十八の對照と見、隨て第二十願の成就——或は適當に云はゞ對應と見做すことは別段に不可なかるべし。要するに第十八が第二十と並存し得ること云ひ得れば足る。

註(一二) 予の所藏なる一本明治二十二年十二月九日の日附ある梵文無量壽經和譯の稿本の序文に追加一則として次の識語が南條先生によつて書せらる。左の如し。

「一魏譯四十八願成就ノ文ノコトハ余ノ義祖父徳母院贈講ノ手寫セラレシ本願成就對ト題スル一冊ニ依ル其奥書ニ左ノ文アリ

右寫本一卷堅田慈敬寺寶庫中得之御親筆未知何人恐存覺尊老御筆跡歟」

註(一三) 「極樂」の上に「願生」の二字を加ふべきが如し。勿論この儘にても意義は畢竟同じことに歸着す。

註(一四) この圖は西尾氏の作られしものをそのまゝ拜借せり。但し西尾氏は梵本第十九番を唐譯第十八及び悲華經の第四十五に相當する立場なれば、梵本一九前半を唐譯の二〇に當てたるは怪むべし。この表は南條先生のそれをその儘承用せしならんか。